

先週私たちは、アンテオケにおける教会の始まりと、そこの弟子たちがいかにして主にあって成長したかを見ました。彼らこそ、周囲の人たちから「キリスト者」と初めて呼ばれた人たちですが、それはバルナバとサウロによる教えの影響が大きかったと思われます。ただ、彼らの始まりは、バルナバやサウロといった指導者たちによるものではなく、外国人の弟子（信徒）たち、しかも、その幾人かによるものでした。

主の御手は、信仰と聖霊とに満たされた人とともにあります。それは今日も例外ではありません。主は今日も、みことばと聖霊によってご自分に近づく者とともにおられ、ご自身の栄光を現されるのです。そこで今日の箇所を見ていきますが、アンテオケ教会がそのようにして異邦人たちを中心に築き上げられている間、ユダヤでは、教会に対する迫害が続いていました。そして、ついに使徒の中からも死者が出るのです。

1-2 節「そのころ、ヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、2 ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した」。このヤコブとは、ヨハネの兄弟で、ゼベダイの兄弟のことですが、彼らはペテロとともに、使徒たちの中でもリーダー的な存在でした。主が山で姿変わりをされた時、主は彼らを連れて行かれ、また、ゲッセマネの園で祈られた時も、主は彼らを近くに置いておかれたのです。そのうちの一人のヤコブが剣で殺された、というのですから、エルサレム教会には大きな緊張が走ったに違いありません。

この時、ヤコブを殺したのはヘロデ王とありますが、それはヘロデ・アグリッパのことで、紀元 37-44 年までユダヤを治めた人物です。彼の叔父ヘロデ・アンテパスは、バプテスマのヨハネを殺し、また彼の祖父ヘロデ大王は、主イエスの誕生の頃、ベツレヘムとその周辺にいる二歳以下の男の子を殺しました。何とも残虐な人々ですが、ヤコブを殺したこのヘロデ王は、教会の中のある人々を苦しめようとして彼を殺したようです。ですから、個人的にヤコブがどうというよりも、ユダヤ人たちを味方にするため、彼らが敵対していた教会を苦しめるために、彼はその指導者の一人ヤコブに手をかけ、さらには、ペテロをも捕らえにかかりました。

3-4 節「それがユダヤ人の気に入ったのを見て、次にはペテロをも捕らえにかかった。それは、種なしパンの祝いの時期であった。4 ヘロデはペテロを捕らえて牢に入れ、四人一組の兵士四組に引き渡して監視させた。それは、過越の祭りの後に、民の前に引き出す考えであったからである」。ヤコブの死をユダヤ人たちが気に入ったのを見て、ヘロデは、ペテロをも捕らえにかかり、そして、ペテロはあっさりと捕らえられてしまうのです。この流れでいくとペテロがヤコブと同じ目に遭うのは、時間の問題でした。過越の祭りの後、民の前に引き出されることで恐らく彼も殺されていたことでしょう。ところがです。

6-10 節「ところでヘロデが彼を引き出そうとしていた日の前夜、ペテロは二本の鎖につながれてふたりの兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。7 すると突然、主の御使いが現れ、光が牢を照らした。御使いはペテロのわき腹をたたくて彼を起こし、『急いで立ち上がりなさい』と言った。すると、鎖が彼の手から落ちた。8 そして御使いが、『帯を締めて、くつをはきなさい』と言うので、彼はそのとおりにした。すると、『上着を着て、私について来なさい』と言った。9 そこで、外に出て、御使いについて行った。彼には御使いのしている事が現実の事だとはわからず、幻を見ているのだと思われた。10 彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりでに開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた」。

このところは、「奇蹟」としか言えないので、出来事自体に説明を加えるつもりはありません。ただこの時、ペテロが「寝ていた」ということを覚えたいと思います。このことが起こったのは、夜ですから、彼が寝ていたのは当然のことと言えるでしょう。でもどうですか？ 次の日には、自分が民の前に出されることを彼は知っていたと思うのです。ヤコブが起こったことを考えるなら、そう寝てもいられないのではないのでしょうか？

ペテロは助けられた後、ヨハネ（マルコ）の母マリヤの家に行きますが、そこでは大ぜいの人が集まり、祈っていました。ですから、彼らが徹夜祈禱でもしていない限り、それは夜でもまだ早い時間帯であったと思うのです。仮に、それが真夜中であったとしても、いや明け方であったとしても、このような状況の中で、あなたなら、ペテロのように寝ることができたと思いますか？

ペテロは、16人の兵士という厳重な監視のもと、ふたりの兵士の間で寝ていた。そして、それは彼がいかに自分の身を主にゆだねていたか、主に対する彼の信頼を思わせてくれます。激しい嵐の中で寝ておられた主イエスのようです。「寝る」行為は、怠惰の象徴として使われることがありますが、でも同時に神様に対する信頼の意味もあります。主から平安をいただくことなしに、眠れないことも実際にあるからです。

話を戻しますが、御使いがペテロを離れた時、彼は我に返ってこう言います。11節「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人たちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ」。御使いに語られ、導かれている時には、それはペテロには、幻のように思えました。でも、門の外に出た時、それが現実であることを知り、ペテロは、それが主のなされた救いであることを悟るのです。そして、仲間たちの所へと急ぎます。

12-18節「こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行った。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。13 彼が入口の戸をたたくと、ロダという女中が応対に出て来た。14 ところが、ペテロの声だとわかると、喜びのあまり門をあけもしないで、奥へ駆け込み、ペテロが門の外に立っていることをみなに知らせた。15 彼らは、『あなたは気が狂っているのだ』と言ったが、彼女はほんとうだと言い張った。そこで彼らは、『それは彼の御使いだ』と言っていた。16 しかし、ペテロはたたき続けていた。彼らが門をあけると、そこにペテロがいたので、非常に驚いた。17 しかし彼は、手ぶりで彼らを静かにさせ、主がどのようにして牢から救い出してくださったかを、彼らに話して聞かせた。それから、『このことをヤコブと兄弟たちに知らせてください』と言って、ほかの所へ出て行った」。

牢にいるはずのペテロが、突然、門の外に立っていたのですから、女中のロダが驚いたのも無理はありません。彼女の知らせを誰も信じられなかったのも理解できると思うのです。彼らはペテロのために祈っていました。でもさすがに、こんなことが起こったら、誰もが驚くことでしょう。でも、すでに見たように、このことは夜ですから、騒ぐとすぐに近所にも知れてしまうので、ペテロは彼らを落ち着かせ、主がどのようにして救って下さったかを彼らに話し、このことをヤコブと兄弟たちにも知らせるようにと願い、そこを去るのです。

この「ヤコブ」とは、主の兄弟のことですが、彼がいつ主を信じたかはわかりません。でも、この時にはすでにエルサレム教会の中心人物になっていたようです。ではその後、なぜペテロはそこを去ったのですか？彼がいなくなかったのがわかるのは時間の問題ですから、ヘロデの迫害の手から、仲間たちを守るために、そうしたのでしょう。18-19節にその続きのことが記されています。「さて、朝になると、ペテロはどうなったのかと、兵士たちの間に大騒ぎが起こった。19 ヘロデは彼を捜したが見つけることができないので、番兵たちを取り調べ、彼らを処刑するように命じ、そして、ユダヤからカイザリヤに下って行って、そこに滞在した」。

ペテロが、彼を監視していた兵士たちによってではなく、御使いによって助け出されたことが、ここからもわかります。というのも、兵士たちをして、囚人を逃がすということは、自分たちがその囚人と同じ目に遭うことを意味していたからです。つまり、それは命を失うことだったのです。そのことは、後にパウロとシラスがピリピで捕らえられ、大地震が起きた時に、囚人たちがみな逃げてしまったと思い込んだ看守が、自害しようとしたところからもわかります。

いずれにしろ、ヘロデは、兵士たちを取り調べた後、彼らを処刑するのです。彼にとっては、それがヤコブであれ、ペテロであれ、兵士たちであれ、他者のいのちは取るに足らないものでした。彼がいかに自分自身を神のように考えていたかがわかります。そんなヘロデに主はさばきを行われるのです。

20-23節「さて、ヘロデはツロとシドンの人々に対して強い敵意を抱いていた。そこで彼らはみなでそろって彼をたずね、王の侍従ブラストに取り入って和解を求めた。その地方は王の国から食糧を得ていたからである。21 定められた日に、ヘロデは王服を着けて、王座に着き、彼らに向かって演説を始めた。22 そこで民衆は、『神の声だ。人間の声ではない』と叫び続けた。23 するとたちまち、主の使いがヘロデを打った。ヘロデが神に栄光を帰さなかったからである。彼は虫にかまれて息が絶えた」。

ツロとシドンとは、フェニキア地方の地中海沿岸にある都市ですが、彼らはヘロデが統治するユダヤから、特にガリラヤ地方から穀物を輸入していました。ところが、何らかの理由でヘロデの機嫌を損ねてしまい、和解を求めるのです。立場の弱い彼らですから、彼らがヘロデに向かって「神の声だ。人間の声ではない」といつて持ち上げたのも納得できます。でも、そこでヘロデは御使いに打たれて息絶えるのです。神様には、自分に栄光を帰したからです。歴史家ヨセフォスによると、この時、激しい腹痛に襲われたヘロデは、五日間苦しんだ末、死んだと言われています。

この手紙の著者ルカは、ヘロデの死のすぐ後にこう記しています。24節「主のみことばは、ますます盛んになり、広まって行った」。教会を苦しめるために、ヤコブを殺し、またペテロをも捕らえたヘロデの死は、弟子たちをして、みことばをさらに語る良い機会となったことでしょう。そういう意味で、この節は、容易に理解できると思います。ただ主のみことばは迫害という逆境の中でこそ広まったということもできますが…。

ただ理解が難しいのは、ここでヘロデを打たれた主は、なぜもっと早くに、つまり、ヤコブが死ぬ前に、ヘロデをさばかれなかったのか、ということではないでしょうか？もし主がそうしておられたら、ペテロが捕らえられることもなければ、彼が御使いによって救い出されることで、兵士たちが処刑されることもなかったはずです。それなら、これらのことが起こる前に、なぜ主は残虐なヘロデを打たなかったのでしょうか？

残念ながら、その答えはわかりません。ただ明らかなことは、このように教会にとって逆境といえる状況の中で、彼らは、神様に熱心な祈りをささげていたということです。5節「…教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた」。12節「…そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた」。もともと彼らは祈っていたことでしょう。でも、ヤコブの死やペテロの投獄は、さらなる熱心な祈りへと彼らを導きました。では、彼らはどのような祈りを、ペテロのためにしていたのか？もちろん、「ペテロを助けて下さい」と彼らは祈ったことでしょう。でもそれは、ペテロ自身のいのちを救うこと以上のものであったと私は思うのです。

以前、ペテロとヨハネがユダヤ当局に捕らえられ、脅しを受けて釈放された時の彼らの祈りはこうです。一部ですが、使4:29-30「主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。30 御手を伸ばしていやしを行わせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行わせてください」。この後、彼らは聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだしたのです。

私たちはみな遅かれ早かれ、肉体の死を迎えます。そして、それぞれ自分の歩みに対して主に申し開きをしなくてははいけません。もちろん、長寿は祝福です。でも、それよりも大切なのは、主から与えられた命を主のために使うこと、つまり、主からの使命に生きることです。ある時、ヨハネとヤコブが、主にこう願いました。「あなたが栄光の座に着かれる時、自分たちを右と左に座らせてください」（参照マコ10章）と。その時、主は「わたしの飲もうとする杯を飲むことができますか」と彼らに問われるのです。彼らは答えます。「できます」と。ヤコブは、主から差し出された杯を飲んだのです。ステパノのように、殉教の死をもって彼は自分に与えられた使命を全うしました。ちなみに、ヨハネの場合は、島流しでした。

私たちには、この世のすべての悪の意味を理解することはできません。なぜ主が、ある時には救い、他の時にはそうされないかはわからないのです。でも、それをして主への不信仰、不従順となる理由としてははいけません。そのように悪が存在するからこそ、主は来て下さったのです。そのすべての悪に対する神のさばきを代わりに受けることで、主は贖いの死を遂げて下さいました。そして、死よりよみがえり、永遠のいのちを与え、また聖霊を注ぐことで、この悪の世にあっても、私たちが主を愛し、信頼し続けることで、最後まで主の証人としての使命を全うできるようにして下さいました。祈りは、私たちが主に近づけてくれるものです。祈りを通して、私たちは御心を悟り、聖霊の満たしを受けます。祈りを通して、主に近づこうではありませんか。